

南米の中央に位置するメルコスール (南米南部共同市場)の中核の国・ パラグアイ共和国

◆ 在パラグアイ日本商工会議所 会頭
田中 裕一

パラグアイとは？

パラグアイ共和国は南米の中央部、日本からみますと地球の反対側に位置しており、面積は日本よりも一回り大きい（約40.7万平方キロメートル）内陸国です。ブラジル、アルゼンチン、ボリビアの3カ国に囲まれており、人口は現在、約600万人、人種は元から住んでいたグアラニ族と白人の混血が主体で、近年では、欧州（ドイツ、ウクライナ、ベルギー等）、西アジア（レバノン等）などから多くの人々が来ています。そしてわれわれ日本人（約7000人が在住）を含む東アジア（中国・台湾、韓国、ラオス等）からも多くの移住者がやって来ています。宗教はローマ・カトリックを信仰する人が大半を占めますが、ドイツ系を中心にメノー派のプロテスタントも多く住んでいます。人口は毎年増えており人口ピラミッドはきれいな円すい形で若年層が多い（人口の70%が30歳未満）将来が楽しみな国です。

国土の中央を大河・ラプラタ河の最大の支流であるパラグアイ河が流れ国土は東西に分かれていて、東部は開発が進み人口の大半が住んでいるのに対して、国土の6割を占める西部（チャコ地方）は開発が遅れています。国土は若干の丘陵地帯はありますが、ほぼ平坦で利用可能な土地で、大豆などの耕作地、牧場などに利用されています。まだまだ灌木が生い茂る未開発な土地も多くあります。

パラグアイは「南米のパラダイス」とか「ユートピア」（トーマス・モアのユートピア思想の原点である

ともいわれている）と称されることもあるほどの豊かな土地です。どこまでも果てしなく緑の大地が広がり、はるか地平線に沈む夕日を眺めることができます。人々は素朴で人懐こく、また持ち前のラテンの明るさ、陽気さがあります。当地で人情味あふれる人々に接すると多分ほっと気持ちが和むことでしょう。また親日国であり、現在も移住協定が有効で、一定の審査を経れば永住査証を取得することもできます。南北の違いはありますが緯度は沖縄から台湾に当たり、気候は亜熱帯に属し、夏には日中の最高気温が40度近くまで上昇するときもあります。6、7月の冬の時期には雪が降ることはありませんが、最低気温が零度近くまで下がる場合があります。雨量も比較的多く、国土は緑に覆われ首都・アスンシオンは森の中にある田園都市の様相を呈しています。

メルコスールの中のパラグアイ、 南米の拠点として

南米にはブラジルとアルゼンチンという2大国が存在しています。この両国とウルグアイ、パラグアイの4カ国でメルコスール（南米南部共同市場）を形成しています。メルコスールがある南米南部は今後も継続的に食料を供給できる数少ない地域であり、経済規模（GDP）はASEANを上回ります。可能性を求め、将来を見据えて欧米諸国を中心に世界から熱い視線が注がれています。この地域に進出する場合、多くの企業は2大国、ブラジル（サンパウロ）、アルゼンチン（ブエノスアイレス）を考えることですが、この



アスンシオン市

両国は国内企業保護を理由に外国企業が事業を始める際にはさまざまな規制・障壁があり、税制面でも必ずしも有利とはいえません。

これに対してパラグアイは比較的規制も緩やかであり、国外への送金なども簡単に行える利点があります。税制面では、投資に対する内外資本投資誘致優遇税制（法令60/90号）があり、また個人所得税がいまだに導入されていないなど、有利であり、南米全体を統括するオフィスに適しています。会社設立は比較的容易であり、外資に対する制限規制はなく、外国資本100%の企業も可能です。外国人の不動産購入も問題ありません。

地理的に南米の中央に位置していますので、首都アスンシオンから飛行機を利用しサンパウロ、サンティアゴ、サンタクルス、ブエノスアイレス等南米各国の主要都市に2時間程度で行くことができます。また物価は比較的安く食材は豊富で野菜・果物等の生鮮食料品が豊富にあります。

日本人・日系人が約7000人住んでいますが、その多くは戦後の農業移住者とその子どもたちであり、現在でも子弟への日本語教育をしっかりと行っており、他の南米日系の方たちと比較して日本語のレベルは非常に高いものがあります。この日系人の中には医師、弁護士、公証人等の専門職の方も多く、日本語での対応が可能です。日系の金融機関、保険会社、ホテル、もちろん日本食品店、和食レストランもあり、快適に暮らすことができます。

パラグアイは可能性が高い国

パラグアイを考えますと「打つ手が多い」、要するに「可能性が高い」ということです。「どうしたらよ

いのか」と考えるとさまざまなアイデアが出てきます。内陸国であり、南米の大国アルゼンチンとブラジルに挟まれている関係もあり、取り残され、開発が遅れており、言い換えれば「まだ手をつけていない部分が多い」というのが実情で、どのような絵でも描くことが可能であり、実行できることがたくさんあるように思います。

日本とパラグアイを比べますと面積は大体同じくらいの国ですが非常に対照的な国であり、日本とは補完的な関係にあると考えます。具体的には、季節が反対、未開発な平坦な土地が広がっている、時差12時間（冬時間の間は13時間）、等々です。パラグアイは内陸国であり、北半球の大消費地から遠いという地理的なハンディがあり、経済発展の阻害要因になっていたと思います。グローバル化とインターネット等の通信の発達でこれが逆に働く、そのような時代に差しかり、新しい発想でのビジネスの提案が可能だと思います。たとえば日系人を活用し昼夜継続してデータ処理を行う事業などは可能性が大きいと思います。

エネルギー・資源に関しては、ブラジルとの国境には世界一の水力発電ダムであるイタイプ・ダムがあり、電気は国内の需要を賄い余剰分はブラジルに売電しています。天然ガスならびにウラン鉱石埋蔵の可能性があるのでないかと探索が行われていますが、残念ながら、いまだに有望な地下資源は発見されるに至っていません。しかしながら、いちばん基本的な資源である「土地」「水」「澄んだ空気」が十分にあるのが特徴です。地下には世界最大級の帯水層である「グアラニ帯水層」があります。

内外資本投資誘致優遇税制（法令60/90号）など外資に対する優遇法がありますが、なかでもパラグアイ・マキラ法の活用は魅力的です。これはメキシコの



薪で走る蒸気機関車

マキラドーラを手本として制定されたもので、パラグアイ国内を保税加工地域として完成品を輸出する場合には、製品に対する課税はパラグアイで付加された価値の1%のみとなります。付加価値には、国内調達の材料やその他の国内生産コスト（労賃、電気代、水道代等）が含まれ、マキラ企業は関税を含むその他いっさいの課税が免除されます。ただし、マキラ法の恩典を受けるためには、メルコスールの域内無関税措置基準、すなわち60%以上のメルコスール原産率充足が必要となります。現在、縫製業、自動車用座席、木材加工、インスタント食品などが稼働しています。製造業のみならずソフト制作等のサービス業にも適用が可能です。

安心できる自然食品・食料供給基地として

ここ数年、石油価格が高騰し、エコディーゼルへの需要が高まり、とうもろこし、大豆などの穀物が値上がりしています。また中国からの輸入品は安全性に懸念があり、将来に向けて安定的に安心できる食料の確保が急務となっています。パラグアイの土地は肥沃であり、雨も多く降りますので無理をせずに安全に生産することが可能です。

パラグアイは甘味料「ステビア」の原産地です。葉に強い甘味をもっており、葉から抽出した物質で砂糖の250倍から300倍の甘さがあり逆にカロリーは普通の砂糖の90分の1程度と、ほとんどノンカロリーの自然甘味料であり、世界中から熱い視線を浴びています。

また、パラグアイの国民飲料であるマテ茶は別名「飲むサラダ」と称されています。ビタミンC等が多いほか、人体に必須とされるミネラル分が豊富な飲料です。茶と称していますが、緑茶・紅茶とは別種でモ

チノキ科の常緑喬木の葉を用います。日本の皆さんにも健康飲料として飲んでいただきたいものです。

その他では薬草も注目されています。「パーロ アスール」「ニャンガビル」は糖尿病に効果があり、日本でも製品化され市販されています。このほかにも現地の人が長年経験と知識を積み上げてきた多種多様な薬草があり、正式に効能が科学的に認められて医学辞書に掲載されている薬草の数は千百種類にもものほります。

パラグアイの主力輸出品は大豆で、生産高は世界6位、輸出は4位であり（2002年）、近年の価格の上昇もあり生産量は年々増加しています。また肉牛の生産が増えており、南米諸国ならびにロシア、イスラエルに輸出をしています。牛肉は認証の問題があり日本には輸出されていませんが、将来大きなビジネスにつながる可能性を有していると思います。このほかの輸出品の商品作物としては、胡麻、綿花、サトウキビなどがあります。このうち胡麻は割合新しい作物であり、急速に生産量を伸ばしており、数年で日本の胡麻輸入の第5位（2002年）になっております。今後、新しい輸出作物が登場する可能性があると思っています。

在パラグアイ日本商工会議所に関して

在パラグアイ日本商工会議所は1975年、当時の永野重雄日本商工会議所会頭を中心とするラプラタ地域への大型ミッションを受け入れる際に創立し、以来パラグアイにおける日系商工業者の団体として活動してまいりました。商工省等の政府機関との情報交換、関係団体との交流、日系商工業者の支援など、国内外でさまざまな活動を行っております。その中でも2005年、2006年の2回にわたり東京でビジネスセミナーを開催するなど、日本からの投資促進には特に力を注いでおります。

パラグアイに関心をもたれる方がいらっしゃいましたら、また質問などありましたら、ぜひご一報下さい。できる限りの協力・支援を行ってまいりたいと考えております（お問い合わせは、在パラグアイ日本商工会議所 事務局長 桑折久太郎 E-mail: shoukoukaipy@yahoo.co.jpまで）。

※筆者略歴：1980年東北大学大学院工学研究科修了、同年、株式会社青木建設入社。パナマ、ブラジルの駐在員等を経て1990年パラグアイに移住。2006年7月に会頭就任。著書に『南米のパラダイス・パラグアイに住む』（1999年、アゴスト社）がある。